

少女十歳の戦争体験記

——
戦禍の中で
——

少女十歳の戦争体験

… 戦火の中で…

「神様、砲弾の破片で私の手足をちぎらないで下さい。この激しい爆撃の中で助かるはずのない事は良く解っています。でも、痛いのは嫌、苦しむのは嫌！・だから一氣に死ぬます様に！・」これが、十歳の私の唯一の「祈り」でした。

そこ此処に転がる死体、被弾により手がちぎれ、足がちぎれた人、はらわたが飛び出した人、死んだ母親の背中で泣き叫ぶ赤子、自分の傷口から這いずり回る蛆虫を力無く払う負傷者、それは明日の自分かも知れない。否一分後の自分かも知！・いつも震え怯えた。只々「即一死」の人を羨んだ。

これは私の同居家族十人の内、私一人無傷で生き残り、沖縄南部の激戦の中に消えていった我が家族の戦場の足跡である

戦争は見境も無く尊い命を奪い、喰らい尽くす巨大な化け物だ。いたいけな子供や年寄り、優しい母、そして家族が頼りにする大黒柱を無情にも地上から奪い去る。

父、酒井吟之介は医師であった。戦争の気配が日毎に深まり県外（の疎開組が増えるにつれ、父も一度は疎開について真剣に考えたに違いない。しかし医師に対する国家の半強制的な疎開阻止があったらしい。父はその実直な人柄ゆえ、疎開を自らの職業倫理に反すると考えたのか結局残留組を選んだ。私は家族と離れても学校と共に学童疎開がしたかったが、許されなかった。四年生としてはチビで、祖母から見た私はまるで幼かったであろう。乗れば学校の割り当て船「対馬丸」である。目的地まであと一步という所（悪石島付近）で八月二十二日、敵の魚雷攻撃を受け沈没してしまった。一七八八名の乗員は船諸共、暗い海の中（飲み込まれ、学童はわずかに五十九名が救助された。のちに聞いた話によると当時の海はサメもウヨウヨして、サメ被害もひどかったと言う私はまだ名前を覚えている級友もいる子供と言えども戦争という巨大な社会背景を背負わされた時代だったのである。

※ 那覇市の大空襲

私が赤子の時、既に他界した母に代わり母方の祖母（スミ）は私達兄妹の母親代わりだったが、その祖母が年寄りと子供だけの疎開を拒んだ。「死ぬときは自分の懐に抱いて」と思ったのであろう。それが家族の運命を決し、昭和十九年十月十日、那覇市の大空襲に遭い、更に沖縄地上戦の戦禍に巻き込まれる事となった。

当時は、どここの家庭でも庭、あるいは身近な広場に防空壕を造っていた。手掘りで、家族が避難できる広さの穴を掘る。楠の木の茂る庭の一隅に我が家の防空壕があった。上空からは、単なる庭にしか見えないように、深く掘ったその穴の上に古畳を幾重にも重ね、更に土を乗せ芝を植える。これで立派な擬装が施され、いつでも避難できるよう備えていた。

それは、十月十日登校前の慌ただしい朝食時であった。警報のサイレンも鳴らないが、どうも様子が変だ。食事中のお箸も持ったまま、兄やお手伝いと共に、素足で庭に飛び出した。県立第二中学二年生であった兄は、まだ十四歳、しかし普段とは違い、ひどく大人びた口調で「八東」(やっか私の幼名)今日は学校に行くなー・と言いおいて、近所(飛び出して行った。戻るや否や 早く防空壕(！)と叫んで、居間の祖母を抱えるように、私共々、庭の防空壕に放り込まれた。続いてお手伝いと父がゆつくり入ってきた。ジツと息を凝らし、窺い見た。遙か上空には爆撃機らしいのがキラキラ銀色に光り、悠々と飛来している。あれが。という爆撃機らしい。そのずーつと下方で友軍の高射砲が白い真綿の様なものを打ち上げている。父はあれではどうにもならん！」と吐き捨てるように言ったきり黙ってしまった。私は国民学校四年生で、子供にとつては長い退屈な一日だった。深刻なのは大人だけ、私は重苦しい壕から早く飛び出したい気持ちで退屈紛れに、非常食のスルメや黒砂糖をねだる始末だった。年端のいかぬ私にしてみれば、日頃の訓練で教え込まれたとおり、モンペを穿き、防空頭巾を被り救急袋を携え、非常カバンも肩に掛け、しつかり空襲の日の 田で立ち「よろしく整えたのだから スルメや黒砂糖」にありつけるのは当然のように思われた。けれど祖母は何時になく厳しい顔をして「ダメ！」と一言言ったきりで、私には理解できなかった。今日が訓練に訓練を重ねたあの「本物」の空襲の日だと言うのに、何故？

さて、その防空壕に閉じ込められたまま退屈な長い時間が過ぎ、爆音も幾分遠のいたように思われた夕刻に父の弟(義彦)が駆けつけて来た。この叔父は父の病院の業務事務一切を取り仕切っていて、空爆の中、入院患者の避難誘導で終日奮闘し、病院は全焼したものの、入院患者は全員無事に避難完了した事を看護婦たちと共に報告に来了。那覇市はほとんど焼き尽くされ、とにかく市内を脱出しなければならぬらしい。

漸く、壕から出て目にした夕空は真つ赤に焼け、空気はホワホワして、なんとも妙な匂いが鼻を突く、子供心にもやつと、事の重大さが実感された。那覇市の自宅の防空壕に半日も閉じ込められ、父の開業する病院も焼け、市内の家々が真つ赤な炎と黒煙に包まれるのを目の当たりにしながら、異常さを感じつつも何故か恐怖感が残っていない。

敵機がまだ飛び交う中、とりあえず、お手伝いさんの実家が首里と言うので首里へ向かう事に決まったが、病院の住み込み看護婦五名には、父と祖母から「この様な時勢に至つては、人様の大事な娘さん達を、責任を持って預かる事が出来なくなつた、無事に那覇を出たら、それぞれ、ご両親の許(帰るように)」との話し合いがなされ、互いの無事と再会を約束して、涙ながらの別れとなった。

爆音は響き、焼夷弾もなお投下され続け、街中至る所火の海と化し、燃え盛る家々の間を、濡らした防空頭巾と毛布に包まれ、大人たちに護られて泊(と向かった。その途中若狭町の裏通りの亀甲墓は殆ど墓蓋が開き中に人々が隠れていた。防空壕代わりだ。

火の粉を払いながら、やつと泊高橋の袂まで辿り着くと、いつの間に連絡を取り合ったのか、泊新屋敷の隠居所に住んでいた父方の祖父母が待っていて合流した。燃え続ける那覇の街を背に、もうすっかり暗くなった首里(の坂を上)がった。首里までは子供の私には、辛かかったに違いないが、それは記憶に無く。着いた所は鬱蒼と木々の茂る中に建つ家だった。疲れきった家族は、そこで雑魚寝の一夜を明かした。

※ 宜野湾村・嘉数

翌朝、馬車で宜野湾(向)かった。

避難先は父の従弟で宜野湾村嘉数国民学校校長(新垣文吉)宅、翌日区長さん宅がこれからの我が家族の生活の場となる事が決まった。祖父母に加えて叔父の家族、お手伝いのマサ子まで合わせて十一名の借家住まいとなり、狭く不自由な暮らしを余儀なくされたが、欲しがりません、勝つまでは」を合言葉に何事もガマン、我慢の国民だった。借家住まいも不自由だったが、学童も本来の学校に登校出来ない。当時、県内の学校のほとんどが日本軍の兵舎となり、生徒は丘の茅葺き掘つ立て小屋に登校し、勉強より防空訓練が主だった。投下爆弾から身を守るには身近な低地に伏せる事その時、四本の指で両眼を押さえ、親指を耳にしっかり差し込む。爆風で目玉が飛び出さないように、鼓膜が破れないように、と目や耳を護る訓練。誰でも記憶に残っている事だろう。

嘉数の学校に駐屯している「石部隊」の軍馬の馬草集めもした。これは「供出」と言った。供出といえ、金属類は出来る限り供出した。軍需用品に変わるのである。校庭の「二宮尊徳」の銅像をはじめ、家庭の鍋釜、果ては指輪まで、お国に出した。

さて、軍馬の馬草刈だが、鎌を使った事もなく、地元の子供達の手際良さを羨ましく思い横目に見ながら、もたついて居ると、みんな親切で揃って私の物を手伝って呉れた。大人も子供も出来ることで、軍隊に協力した。またイチゴや桑のみ採り、ススキの穂の芯が食べられる事、生芋も服の裾で拭いて、かじる事など、地元の腕白たちに教えてもらった。

借家は、あまりに狭く不自由で、近くに又一軒借りることになった「サンダージーマ」という珍しい名前の小さな一軒家で、そこに叔父とその妻子は移った。

大空襲の日から三日ほど経って祖父、兄、叔父が那覇の様子を見に出かけ若狭町の住宅と泊新屋敷の隠居所が焼け残ったことを確かめて帰ってきた。話によると市内でわずかに残った家々は、屋根瓦を残して家財道具から壁や床板まで一切合切盗難に遭っているらしく、お隣の木下醤油の親父さんも被害に遭い「カマジシクートータン」と言う話も出た。方言で(苦虫を噛み潰していた)と言う意味だが、幼い私には「シシ」と言う言葉から、木下の親父さんはきつとシシ(肉)を食っていたのであろうと早合点した。それで私も「カマジシを食べたい」と祖母にムズかった。

それはともかく泥棒騒ぎの中でも、我が家の家財道具は盗難を逃れ、不幸中の幸いと家族は喜んだ。盗難を逃れた理由はちゃんとあり、大空襲後、我が家は警察本部となっていたので

それからは来る日も来る日も荷馬車を連ねて家財の運搬が始まった。

私は疎開先の新しい生活が始まって、那覇の様子や天妃国民学校の事、友達の安否が知りたくて、あの手この手で知恵を絞り、那覇に連れて行って欲しいと頼みせがんだが、全く相手にされずベソをかいた。でも子供としての新天地の日々は結構楽しく過ぎていった。しかしその間も空襲警報は毎日のように発令され防空壕との往復は繰り返された。

父は病院が消失したので、読書と、筆を持つことはあっても趣味の「謡」も尺八も全く、することなく、寡黙であった父が一層言葉少なくなった。

兄(章光)は宜野湾から那覇の県立第二中学へ通った。学校と言っても勉強ではなく勤労奉仕や戦闘訓練が日課となり家に帰ると、同じ年頃の大家さんの長男、次男と竹刀で打ち合い剣道の稽古をするなど、一人とは大の仲良しで、二人もまた県立第一中学の学生だった。

当時県内の中学校は八校か九校位だったと思う。非常に競争レベルが高く、今でも戦前の旧制中学卒業と聞くだけで私は尊敬する。その優秀な中学生たちが、黒い学生服は兵士と同じ国防色に変わり、足にキャンパンを巻き、シヨベルを担ぎ登校する。そんな兄の日日だった。

祖母(スミ)はお手伝いのマサ子に手伝わせ、乏しい食材を工夫し美味しく料理するのに余念が無く毎日大奮闘。

一方農業で暮らしてきた父方の祖父母は散歩に出かけ田んぼの蛙を捕ってきて、くの字型にさばき焼いて賞味した。小さな蛙だったが何とも言えぬ香ばしさと美味しさで、今でもコクのあるあの味は記憶に残っている。家族はみんな出来ることで協力し合って不自由な生活に耐えた。

その防空壕は嘉数に点在する「ガマ」と呼ばれる自然の鍾乳洞の一つを利用したもので、祖父は元々百姓だが、大変器用な人で鍾乳洞の中を、防空壕とは思えない、まるで新築家屋の様に立派な部屋に仕上げ畳を敷き、タンスを並べ、更にもその中を流れる湧き水を利用して炊事や洗濯も快適に出来るほど本格的なものに造り上げた。子供の私にはこの上ない立派なものに見え、どんな爆弾が飛んできても、此処に入っている限り絶対に大丈夫だと思えた。しかし、その防空壕に逃げ込む機会を失った。

※ 父の出征

年が明けて遂に父に召集令状が来た時の赤紙だ。球部隊の軍医として入隊、祖父と兄が送って行ったが、夜も更け、眠気を我慢して待ったがなかなか帰って来なかった。

前後して父の弟(私の叔父)も歩兵隊として入隊した。友軍有利の大本営発表にも拘らず空襲は毎日に激しくなり、軍隊の動きも慌ただしくなった。出征して一月か二月ほど経ったある日の夕暮れ時、突然父が「家族面会」で帰って来た。しかし父を囲む大人達の余りにも緊迫した表情に圧倒され、私は自分から父に声を掛けることも、近寄る事も出来なかった。初めてみる父の軍服姿、長い軍刀に膝まである軍靴も脱がず、濡れ縁に腰を降ろしたままだった。これまで私の知る父は白衣か着物姿である。

子供の頃から逸材といわれた父、明治三十九年生まれの子供が、親許を出て十里も離れた首里の男子師範付属小学校(単身入学した逸話や、沖縄県立第二中学校では、当時の校長志喜屋孝信先生(米軍占領下の民生府主席・琉球大学初代学長)の強い薦めと、父親の遠大な教育理念により「慈恵会医科大学」と進学、苦学で医師となる。父は書道を初め、謡「能楽」や尺八を嗜み、医師という職業を別にしてもかなりの文化人であったと私は思う。

戦時という時代に飲み込まれ、父は四十にも満たずして軍医として徴用された。生涯の別れとなるやも知らぬ家族面会は僅かな時間だった。父は帰隊際に私を抱き上げたが、言葉はなかった私も何も言えなかった。それが物心ついてこの方、父に抱き上げられた初めての経験でもあった。ひしと抱く父の軍服のゴワゴワした感触は今も肌に伝わってくる様だ。その時、父は少尉か中尉だった。重苦しく打ち沈む家族を残して部下の兵隊二人と共に帰隊した。子供心にも再び逢える日はないだろうと恐れつつも予感された。又、叔父は入隊以来一度の帰宅もなかった。更に、宜野湾に駐屯していた石部隊の衛生兵、新妻上等兵(医学生)は借家住まいの我が家に親しく出入りしていた。父や祖父母のお気に入り家族の誰もが好感を持っていた。私もコンペイ糖入りのカンパン袋を持ってくる兵隊さんとして大好きだった。後に兄が戦傷して、いまわの際に残した言葉も「新妻さんを捜して行け!」だった。しかし私は新妻さんの事は戸「石部隊の衛生兵で新妻さん」と言う以外のことには、出身地も何も知らなかった。その新妻上等兵も三月の下旬頃、「これから自分の部隊が移動するが行く先は分らない。しばらくお会いできません、」と言い残して去って行った。しばらくどころか、彼との永遠の別れの日となった。

※ 父を求めて部隊を追う

四月一日、遂に米軍は沖縄本島(上陸した。それより先、三月二十六日、既に慶良間諸島へ上陸。しかし、その時私たちはその事を知らなかった。日本軍の大本営はケラマ諸島上陸」の事を住民に知らせる事はなかった、しかし子供の私でも異常である事は知る事が出来た。これまで経験した事のない爆音爆発音でとんでもない事が起こっていると感じた。どの様な状況下でも家族は一緒でありたい、もし死ぬ事になる時でも家族は共にと言う思いで、とにかく父の近くに行こう、祖父としては出征した二人の息子に、今一度逢いたいとの強い思いと悲壮感で、軍隊を追う事となった。

先ず総司令本部のあるらしい首里に行こう、野戦病院の在り処も分かるだろう、消息が掴めるかも知れない」と見当をつけ藁をも掴む思いで首里を目指した。砲弾の飛び交う夜道を、伏せては進む、

一昼夜かけてやっと首里に着いた、(今なら、さしたる時間も掛からない距離である)

(首里は米軍の猛攻撃を受けて想像を絶する激戦地となっている。首里のお城の丘に日本軍の総司令本部のある事を百も承知の米軍は、目標を定めて徹底的に砲撃を繰り返し、私達が着いた頃には、お城は焼け落ち、そそり立つ城壁さえ跡形もなく崩れ落ち、岩肌を剥き出し、樹木の幹は燃えカスとなり、割れた赤瓦は散乱、板切れ一枚も無いほど焼き尽くされ、砲弾の穴と、破片の転がる、見るも無残な焦土と化した城下町首里の有様を、今でも鮮やかに記憶している。

こんな中で果たして父を捜せるか逢えるだろうか？ 球部隊は何処ですか、野戦病院は、どこですか？」と軍人に尋ねると お前らスパイか！ 軍隊の事を根掘り葉掘り知ろうとする」とすごい剣幕、父を捜す事の困難さを思い知らされた。それでも激しい砲撃の中、先ず家族の避難場所を確保しなければならぬ。やがて辿り着いた所は首里の何処だろうか、私には分らない。大きな鍾乳洞を利用して何百名もの避難家族で、ごった返している。人々は外の異常な爆音で黙りこく息をのむ。子供は怯え泣き叫ぶ。その上、食べる事から排泄までこの洞窟の中で行われた。子供心にも地獄絵図を思わざるを得ない。しかしそれはまだ序の口でしかなかった。幾日も経たずして、軍人が五、六人入って来た。『こは決戦場になる、この壕は軍隊が使用する、日暮れと共に住民は出るように』との退去命令が出た。しかし、この何百人もの住民の中からは一人の反論者も拒否者も出なかった。国が決めたこと、軍隊の命令は絶対であり、国民が反論、拒否など出来ない時代であった。

その夜、移動準備をしていると、母親代わりだった母方の祖母が一言の言葉も残さず突然逝ってしまった。自死」であった。これほどのショックは私にとって初めての事だった。死ぬ時は私を懷に抱いて一緒に連れて行ってくれるものと思っていた祖母、読書家で知識の豊富な人だった。私が良くない事をすれば膝を交えて、とことん諭す祖母、私は那覇の空襲で焼け残った振袖を、正月に着る」と騒ぎ立てたり、三月には、お雛様を飾るのだと、喚いたりした。祖母は今、此処、宜野湾の人達にお世話になっている。晴れやかな着物など着るべきではない」と納得するまで諭す。正月の振袖の代わりに久米島紬で、胸当て付き、足首ギャザーのふっくらモンペを仕立ててくれたり、三月のひな祭りには、千代紙でお雛様やお内裏様を折って、更に芋でお菓子をつくり、地元の子供達にも振舞った。祖母との思い出の、ひとコマひとコマで、良識ある祖母であったと、成人して思った。うちは病院だ。薬にも詳しく色々の薬と共に死ぬ為の薬も持参したのであろう。この歳で砲弾の中を逃げ回るのは嫌だと、覚悟の死だとは思いますが、私に一言も無く黙って逝ってしまったことがいまだに信じられない。祖母の遺骸をどうしたのかも覚えていない。

軍命に従って壕から出た私達は、丘から沖合いを見て更に肝を潰すほどビックリした。無数の船団が十重二十重に島を囲むように海上を埋め尽くしてドンドコ火玉を打ち込んでいる。赤く弧を描いて遠く近くに炸裂音が響いた。これが「カンポウシヤゲキ」であると言う。後で知ったことだが、戦記資料によると米軍の戦艦は千五百艘にも及んだらしい。家庭の婦女子を「国防婦人会」と名付け、竹槍で米兵と戦う訓練までする日本と、これほどの物量差があることなど、子供の私に知る由もない。あれは敵の軍艦だ。ここは決戦場になる。敵陣突破で北部へ行け」と言われ、頼みの父の消息も掴めぬまま、北部へ行けと言う軍人の指示にも逆らって、家族は、父を捜すという強い意志で軍隊の進む方向へと向かった軍隊を負って行けば父に逢えると思った。軍隊は南へ、家族も南へ、軍を追う、その頃降り続く雨で農道は泥濘、足を取られ一步一步が大変だった。普段は泣き虫の私が泣く事も忘れ、四歳年下の従弟の手をとり、荷物を背負う大人達の後を必死に追った。その頃からこの防空壕も避難民で溢れ、入ることも出来ないほど犇めき合っている、大きな壕は軍隊優先掘った地下壕は掘った人達の物なかなか壕に入る事が出来ない、入り口に身を寄せ、ずぶ濡れになり冬でもないのに寒さに震えた。

敵の砲撃は夜明けと共に激しくなり、昼の移動は全く出来ない。上空には大型爆撃機、海の戦艦からは激しい艦砲射撃、更に怖いグラマン、小型のこの戦闘機は、屋根や頭上すれすれに低空する。狙いを定めて機銃掃射すれば百発百中する程の性能、それは最も、恐ろしいものだった。夜明けとともに編隊を組んで飛んで来るこのグラマンは機銃弾を撃ち尽くし、夕方になると母艦に帰る。ジッと息詰まる日中を過ごし、日暮れを待つ。夜とて砲撃が止むわけではない。夜ともなれば照明弾、家々を焼き尽くす焼夷弾、榴散弾、戦車からは迫撃砲、火炎放射等、怖いグラマンが時刻母艦に帰るその隙に次の隠れ場防空壕探しとなる。田圃の様な泥濘を、泥にまみれながら砲弾の炸裂音が近ければ、七歳の従弟でさえ至近弾を判断し、低地や岩陰に身を伏せる。大人の指示が無くても、体で覚えている。幾日かけて東風平に着いたかよく分らないが、覚えているのは東風平国民学校の裏手の小高い丘の防空壕、コの字型の丘には地元の人達が掘ったであろう、地下壕が幾つもあり、丘の中央に日本軍の野戦病院壕もあった。久しぶりに防空壕という安全な隠れ場を見つけることが出来た。しかし、その頃からは手持ちの食料は全く無く、叔母は砲弾の中を命がけで食料調達に壕から出て行く。年寄りと子供を抱えることとなつた嫁叔母(ツル)は決死の思いであつただろう。掘り尽くされた芋畑で、遠く近くに投下される砲弾に怯えながらどんなに辛かつたであろう。身の危険も顧みず懸命に尽くしてくれた叔母を思えば、今でも胸が痛む。壕で待つ家族も気が気ではない。無事に帰るといふ保障は何もない。息詰まる思いで叔母を待った。一日一食の貴重な食事である。

※ 酒井家の大事な兄の被弾死

東風平の壕では、敵の戦闘機グラマンの飛ばない夕暮れ時、蒸し暑い、ジメジメと空気の悪い壕から出て新鮮な空気を吸い、体を伸ばすひと時を過ごすことが出来た。そんなある日の夕方、いつものように、他の避難家族と共に壕外で夕涼みをしていた。勿論、足元の破片や爆撃音に神経を尖らせながら、危険を承知の行動である。

ところが、そのど真ん中か、近くか分らないが突然砲弾が炸裂した。私は訓練に訓練を重ねたあの伏せると言う事が出来ないほど突然で、両手で顔を覆い体が硬直した。静まる気配は分かる、恐る恐る辺りを見る、その光景は修羅場と化した、私は足が動かない。わずかニメートル先の壕に駆け込めない。倒れたまま動かない人、被弾して起き上がろうともがく人、血だらけになって壕に飛び込む人、大パニックだ、硬直した私の前を兄が胸を鮮血に染め壕に飛び込むのが見えた。弾かれた様に私も続いた。一步踏み出したその時、何かに蹴躓いた。見ると今まで私と並んで談笑していた仲良しで、同い年の男の子が足元に横たわっている。よく見ると眉間の辺りから吹っ飛ばされ、勿論即死だ。大変なショックだ、でも血だらけの兄を見ているので仲良しの男の子の死体を跨いで兄を追った。被弾した兄は肩先から脇にかけて鋭く切り裂かれ、脇の皮が僅かに残るだけの重傷であつた。腕は体に付いているが全く機能しない、別の手で抱えている、目の前が真つ暗になった。泣きながら「お兄ちゃん痛い？・ネー痛い？」としきりに聞いた。兄は気丈にも「いや、大丈夫痛くない」と堪えながらはつきり答えた。痛くないはずがない。私は何をしてあげればいいのか、只おろおろするばかり、直ぐに丘の上の野戦病院から担架が廻され兄は運ばれた。その時何人死亡し負傷したのか、私は知らない。それまでも私たち兄妹は、父の消息を知りたくて、野戦病院に出入りして軍医や看護婦と親しくなっていた。

厳しい戦況、乏しい医療機具の中で充分な手当ても出来なかつたと思われるが、軍医や看護婦の心配りで精神的には手厚い看護を受けることが出来たと思つている。否思いたい。兄の左腕は体から切り離された、切り離される場所を私は見ていない、しかし腕の無い体は血染めの包帯でぐるぐる巻きにされ粗末な板の柵に運ばれてきた。傷口の出血はひどく、必死の願いも空しく、水をくれー水を！・と呻き苦しみながら、遂に息を引き取つた。水を存分に飲ませればよかつた。亡骸を前に、詫びた。後悔だけが残つた。兄はわずか十四歳、只々哀しかった。勤労奉仕ばかりの登校だつた兄は、米軍上陸の四月一日、たまたま家族の許だつた。

兄は誰もが認める貴公子だつた。賢く輝く瞳の持ち主で、子供とは思えぬほどの大変な読書家でもあつた。化学が好きで実験もよくした。手伝つた私が薬品火傷を負つた事もある。肉親感情を抜きにしても、こんな戦争さえ起こらなければ、兄は立派な大人になり、それなりの功績を残す有為な人間になつたであろう。兄妹でありながら兄と私は、雲泥の差があり、それを当然のこの様に私は受け止めていた。私にとつて兄はこの上ない誇りであり一族にとつても期待の的だつた。早生まれの十四歳で旧制中学の二年生、優しかった兄、防空壕の片隅で、小粒の黒糖を私だけに渡し「これだけ

無い、内緒だぞ」と妹に優しい兄だった。その兄が突然目の前から消えてしまった。耐え難い孤独感に襲われながらも、私だつて間もなく兄の許（行くのだからと、この様な漠然とした思いに支えられた様な気がする。

我が酒井家にとつて掛け替えない兄、期待を担っていた兄、兄の戦没は勿論、祖父母をも打ちのめした。その落胆は、父を捜す気力も無くし、私は食事もほとんど摂らなくなった。嫁叔母が命がけて調達して来る貴重な一食一食である。それを食する事が出来ず、祖父に叱られたのを記憶している。どんどん痩せて体力も気力も無くし衰えていった。

※更に南部の激戦の地へ

兄、戦没の翌日、近くの壕が敵の火炎放射を浴び、その壕の避難者は全滅したとの情報が入り、また、野戦病院も撤退することと、私達も東風平の壕から出る事になった。

火炎放射というのは上空の爆撃機からも戦艦からも打てない。戦車、あるいは兵士が抱えて砲筒から炎が放射されるのである。という事は既に近くに敵兵が来ていることになる。

やつと見付けた防空壕を捨てて出ることは大変な決心が要る、この先、壕はあるのか家族は不安だ。しかし、ほどなく焼き殺される事を承知でこの場に留まることは出来ない、壕を捨

てる決心をして移動の準備に掛かる。

また当時の野戦病院の移動というのは非常に悲惨なものだった。起き上がることの出来ない、重傷病兵を担架で運ぶ軍力は既になく、移動時、自力で歩ける者だけが隊と共に移動する。哀願する傷病兵を置き去りにする。おむすび一個有ればよし、芋一個かそれすら無いこともある。その時必ず一服の薬を、一杯のミルクを渡す言うまでもなく、迫る敵軍の捕虜となる前に、ひと思いに死ぬるようという最後の「死薬」である。大人のひそひそ話で子供の私達も知っていた。敵は「鬼畜米英」捕虜になれば、八つ裂きにされる、一寸刻みにされると、私達は思い込んでいた。だから死薬が必要だった。結局、防空壕を捨てて、出る事となった。

防空壕の外、地上の状況は知っていた。破片が散乱していることも、また砲弾でスリ鉢状の大小の穴があき泥水がたまり、時には中に死体が転がり込んでいたこともあった。

しかし、外（出て、更に震える思いで戦況の悪化を知った。農道といい、畑や原野至る所に死体、死体、死体である。死体は様々だ。真黒に腐敗し膨れ上がった死体、真夏の灼熱の太陽の下で直に腐敗し死臭を放つ。死体だけではない。歩けないほどの重傷者や親を失った幼い子供が力なく（たり込んでいる。負傷者は手当ての術もなく、せいぜい拾った豚脂と塩を混ぜて傷口に塗ることくらいだ。死んで腐ったから蛆が湧くだけではない。生きた人間に蛆が湧く。薬も消毒薬も包帯も無い、不衛生な傷口は直に腐敗しウジが湧く、自分の傷口を這いずり回る蛆虫を自分ではらっている。また死体は転がっているというより折り重なっている状況である。東風平の壕を出てからは、ガマや防空壕は全く見つけることが出来ず、やつと見つけても、ガマは軍民共有となり「もう一杯だ、入れない」と断られる。なんとか入れてもらおうと必死で頼んでも、敵に見つかる、標的にされるゾ！壕の前でウロウロするな！」と怒鳴られる。当時のガマの中は「地獄の様だった」と、今は言われて

いるが、砲弾から身を護れる唯一の天国でもあった。しかし、軍隊優先のガマは南部の片隅に追いつまされた何十万の避難民を抱える程の收容能力は無い、南部のこの一帯は壕(ガマ)に入れない避難民が地上で彷徨渦巻く、そこに一斉砲撃を受ければ当然死体の山となる。

こんな中で、あの様な重傷で苦しみたくない。一思いに死んでしまえば痛くない辛い。そのころから神様に助けて下さいなんて、とんでもないと思った。死ぬ覚悟はちゃんと出来ている。でも痛い、苦しむのは嫌、破片で傷を受け腐ってウジが湧き何日間ものうち廻つて挙句の果てに死ぬ、それは嫌だ、神様お願い、中途半端なケガをさせないで一気に死ねます様に」との祈りが始まった。その後、十歳の私の念仏となった。

グラマンこそ飛ばないが、夜間でも容赦なく砲弾は飛び交う。岩陰や壊れかかった農家や納屋を一時凌ぎの隠れ場とし、砲弾の嵐の中をあても無く転々とするだけだった。その頃の私は、沖繩がどんな地形で、どの位の広さか、今時の子供と違つて皆自分からない事ばかりだった。戦禍の中の人々は西に東に南に北に南部の片隅で入り乱れ、行き場を失い、夢遊病者の様に夜の闇をさまようばかりだった。行き交う人々は自分の向かう先が安全だと思つているのだろうか。子供心にも不思議でならなかった。四方八方至る所で砲弾は炸裂する。様々な砲弾の炸裂音を瞬時に聞き分け、それぞれ自分で判断し反応する。

そんな繰り返しで、何時終わるとも、果てるでもない戦場で、なんの手掛かりも無い父を捜す気力も無い、逃避行は続いた。これほどの戦況の悪化にも拘らず、今に日本本土から援軍が大挙して助けに来る、もう少しの辛抱だ、我慢だと住民は信じていた。そんな極限の中で眼にした光景は、今なお忘れる事のない体験の一コマである。

やはり壕探しで夜間の移動中、集中攻撃を受けた、伏せた。いつものように頃合をみて互いの無事を確かめ合った時、家族は無事だったが、遂今しがたまで一緒だった見知らぬ女性が、砲弾で出来たばかりの穴の中に転げ落ち、もがき喚いている。山で待っている子供の所に連れて行ってくれ」と言うのである。よく見ると両足が無くなっている。可哀相に思えてもどうにもならない。誰もが自分を支えるだけの力しかない。精神力も体力もない、手を差し伸べる事が出来ない。ところが、通りかかった一人の軍人が、その気の毒な女性を背負い、足の切れた身体を軍刀で、支え歩き始めた。胴体を支えた軍刀の下から、ちぎれた肉塊や夥しい血が流れ出し、軍服もキャハンも血で黒く濡れていくのが夜目にも分かった。この女性は軍人の背中で、山で娘が待っている」と喚き続けた。女性の意識がなくなり息絶えるまで軍人は背負つて歩いた。女性は、幼い娘に逢える希望を抱いて軍人の背中で死ぬことが出来て、さぞ心は満たされたであろう。戦場で遭遇した人間性の美しい発露である。あの軍人は何県の出身だろう。そして何よりあの戦禍の中を生き残れたか。終戦を迎えることが出来たのだろうか。この大戦は、この様に崇高な精神の持ち主や、勉学中の学徒出陣で若き青年達の惜しむべき幾多の尊い命を散らしたのか……そして素晴らしい才能の芽を摘み取ってしまったことが、あの若者達はみんな自分の、夢をかけた明日が見たかったであろう……。

その一方で、部隊を外れた兵隊も増え、民間人に混じつて行動するようになり、オレは軍人だ」と威張りちらし、イライラする兵隊、軍服の上に農夫の着物を羽織つて民間人の振りをして逃げ回

る兵隊、幼い子どもが大事そうに手にする小さな芋をぶん取る兵隊、様々である。余りの

恐怖で戦場は人間が人間でなくなるところ、最早、彼らは私達が頼りにし、私たち住民を護ってくれる軍人ではなかった。しかし、今思えば誰も彼らを責める事は出来ない。彼らもまた戦争の、国の犠牲者なのだ。彼らにも、ひたすら祈る思いで、無事の帰還を待ちわびる家族があったに違いない。故郷に帰ればよき父であり兄であり善人であろう。

※ 頼みの祖父被弾し自決

他人同士の行動はいつの間にか別れ別れになり、その頃には自分が南部のどこにいるのかさえ分からぬ戦争が終わってから分かったことだが辿り着いた所は真壁という村だった。茅が乗っているだけの小さな農家だ。夜明けと共に始まる激しい砲撃、一更に低く飛び交う敵の戦闘機グラマンから少しでも身を隠すにはこんな小屋でも仕方が無い。砲弾除けにも破片除けにもならない事を百も承知で小屋に隠れ込む。グラマンから見えないだけ、東風平のような壕が欲しい。家族六人小さく纏まり、ボロボロになった一枚の毛布をみんなで頭から被り気休めとした。私は祖父の膝に抱かれ、ひしと肩を寄せ合った。容赦の無い砲弾は夜明け前から一層激しくなり身動きも出来ない、固唾をのむ。その時、祖父が呻いた。毛布を撥ねのけて見ると、祖父は背中から左脇腹にかけて被弾、溢れ返る鮮血で傷の程は分からないが重傷である。祖父が庇ったのだろう、膝の上の私は無傷。祖父の被弾は私たちを益々どん底に突き落とし、子供達には見せまいと、祖父自らの意思で子供の私達は目の届かない近くの石垣の陰に移された。声は聞こえる。心細く不安で小さな従弟妹たちの手を痛い程握り締め、祖父の手当てを待った。ところが私が聞いたのはこれまで聞いたことも無い、この世のものとは思えない、祖父の断末魔の声だった。なんと言うことだ、それが祖父の最期だった。

後で知った事だが、叔母の話によると家族の足手まといになるまいと祖父はあの血の海の中で自決したのである。辛かったであろう、苦しかったであろう。泣いた、私は泣いた。祖父は医師である息子の手当てを受ける事も出来ず「自決」という手段を選ばざるを得なかった。これが戦場だ。戦場とは人間の努力、頑張り、我慢など全く通用しない間答無用の世界である。

神様のような祖父、実直な祖父、その顔を思い浮かべるだけで心が洗われる様な祖父、そんな祖父が、何でこんな辛い最期なのか。神様なんて居ない」とその時思った。

これも後で知った事だが、大人達は既に「死の取り決め」をしていたのである。誰がやられようと自力で歩けない程の傷を負ったら、本人の為に皆の為に、直ぐに楽にすること、どうせ時間の差だからと打ち合わせた。祖父は身をもって最初に実行したのである。農業で生き、多くの子供達を育て、長男の成績の良さと、志喜屋孝信校長の薦め、そして祖父の遠大な教育理念により長男（私の父）を医者にした。当時普通の農家としては大変な事であったであろう。

大好きだった祖父の亡骸をそのまま置き去りにして、頼りない者同士でまた移動した。

移動すると言う事は目的地があつて移動するのではない、とにかくそこに居続けることが出来ないから少しでも身を隠せる場所がないか只さまよひ続ける、農道も畑も原野も至る所に死体は転がり、強烈な死臭が鼻を突く。手が吹っ飛んだ、足が無い首が、はらわたが・様々な死人や負傷者を見て怯えた。祖父の死で、神はなし」と思いつつも十歳の私はやはり 神様お願いします一気に死ねます様に」と祈らずにはおれなかった。

※ 家屋の下敷きになる

珍しく焼け残った瓦屋根の民家があつた。勿論壁も床も無い、砲弾除けにもならない。それでも避難者は犇き合っている。しかし、そこも一夜だった。裏の畑にかなり大型の爆弾が投下され、火こそ出なかったが、爆風で家は潰れた。わずか一屋敷違いで直撃は免れたが、一人逃げ遅れた私は瓦礫の下に押し潰されてしまった。大声で助けを求めたが、聞こえているのかどうか。家族の無事も分らない。自分が怪我をしているのかさえ分からない。

小さな体は折り重なる瓦礫の隙間に潜り込んだらしい。上で人の歩く気配がした。きつと私を捜しているに違いない。更に大声を張り上げた。その時間はとても長く感じられた。漸くの叔母と軍属らしき人に助けられた。叔母は泣きそうになりながら、私の頭、肩、足、指先まで怪我の無いことを確かめホッとして私を抱きしめた。無傷だったことは奇跡に思えた。

近くの避難者のほとんどが被弾死傷した。真昼の出来事で相変わらず頭上にはグラマンが低く飛び交い、人々が行き場を失い騒然とする中で叔母に手を引かれ、祖母と叔母の子供達の待つ納屋に向かった。その時、私と同じ年位の男の子が、崩れかけた石垣を背に虚脱状態でへたり込んでいるのが目に飛び込んだ。首に被弾し鮮血にまみれ、片手で頭を支えている、首の力で自分の頭が持てないのだ。泣く気力も無いらしい。きつと親が先にやられたに違いない。どこを向いても似たような光景ばかりだ。どうすることも出来ない。次は自分かもと、誰もが思っている。だから祈りはひとつ 神様、一気に―と念仏を繰り返すばかり。

※ 祖母の即死と叔母達の被弾

毎日、昼は物陰に身を隠し、夜は壕探しで歩きまわる。他の事はよく覚えていない。食した記憶も無い。父に逢うなど到底出来るはずもなく、心身ともに疲れ果て、死を覚悟してはいるものの血を流し、手足がちぎれ、苦しむのは嫌だ、嫌だと恐怖におののいた。戦争つて終わりがあるのだろうか？

壕が無い、あつても一杯で入れない、仕方なく隠れ込んだのは畑と原野に続くアダン林。と言つても二、三本の葉陰、グラマンから身を隠せると思えた。既にポロポロの一枚の毛布を何時ものように頭から被り息を潜めた。人影も無い。聞こえるのは上空の爆撃機と、低空するグラマンの轟音と、様々な砲弾の入り混じった爆発音だけ。恐怖で身が縮む。追い詰められた南部の片隅、喜屋武岬の爆撃の激しさは、今思い出しても震えがくる。

それもそのはず終戦後分った事だが、全軍総司令長官牛島中将が自決した「摩文仁ヶ丘」の麓だったのである。

戦場で逃げ回る間に私たちは、砲弾の種類と爆発音、飛距離、遠くに着弾するか至近弾になるのか、体が覚えた。しかしこのアダンの木陰で、目も眩むほど明るくなつたと思つたら物凄い轟音に体中が包まれた。全く判断がつかない、頭が膨張するような、耳が圧迫されるような表現がしたい。どれくらい時間が経ったか、とにかく我にかへつた時、いつもの習慣で、ボロの毛布を跳ね除け、先ず家族の無事を確かめた。アダンの葉は吹っ飛び、青空の下に晒される状態で祖母を呼んだ。返事が無い。揺すつたがやはり返事が無い。傷らしいのは無い一滴の血も流れていない。しかし、祖母は息絶えている、即死だ。亡くなった祖母を見て、羨ましいと思つた。おぼあちゃん良かったね」。私の念仏となつている。苦しまずに逝つた祖母をホツとする思いで見つめるばかりだった。祖父の壮絶な自決のあとだけに本気で∞

羨んだ。父方のこの祖母は激しい戦禍の中で、すっかり言葉を失つた如くもう長いこと声を聞いていない事に気がついた。傍らの幼い従弟妹達が「痛いようー」と力の無い声で泣いている。どこが？ 分らない」と泣くばかり、すると嫁叔母も「私も動けない、こんな状態だから早く逃げなさい」と息も絶え絶え、私を気遣い励ます。私は一人で逃げるのは嫌だとか、ここに皆と一緒にいるのだとか全く考える力が無い。叔母の言葉に押されて、そこを飛び出した。

※ 戦火の中十歳の私の一人歩き

岩陰に隠れ人を探す、誰でもいい… 浴びるほど激しい砲撃の中、みんな物陰に隠れ息を潜めているのは当然で、人影の無いことは、よく分っているにも拘らず。沖縄中の人が私の家族と同じ様にみんな死んでしまったのだと錯覚するほどの不気味さだ。その頃の私の靴はもうボロボロで、幾月も雨の中、泥の中を逃げ回り、靴底と上の部分が離れ離れになる程の靴を包帯やボロギレを使い、十歳の知恵で、グルグル巻きにして、足から靴が逃げないように縛つた。歩き辛い靴を引きずつて、岩陰やスキの根元に身を潜めながら、父を探す手立ても気力もなく、募る不安の中。誰でもいい、人と必死だった。

思えば父と叔父の出征、母方の祖母の自死、兄の被弾死、祖父は重傷のうえ自決、祖母は6爆風により即死、そして今、瀕死の叔母と幼い従弟妹たちを置き去りにして、十歳の私は戦場を彷徨っている。この日は最も長い一日に思えた。やっと陽が沈み、グラマンが消えた頃、

居た、見つけた、人だー生きている人がいた。一目散に駆けた。破片を踏まないように、死体を蹴飛ばさないように駆けた、近づくると軍属の男女と私と同年位の女の子の三人連れだった。挨拶も名乗りもせず仲間となった。覚えていた事と言えば見知らぬ者同士、日中はグラマンに見つからない様にじつとしていたグラマンの消える夕暮れ時から始まる隠れ場探し、少しでもましなところは無いか。やつとここで良いかと、腰を下ろした岩陰でも、死臭が漂ってくる、これはもうどうにも我慢出来ない。人間の死臭というのはとに角、耐えられない。次に軍属のオジサンから貴方達にも分けてあげよう」と手榴弾をもらった。初めて手にした日本軍の手榴弾はズシリと重く、これで最後の最後一思いに死ねると言う、宝物のように大切に救急袋の中に入れた。

今思えば、そのときの私は手榴弾の使い方が解っていないかった。次に仲間の四人で物を分け合って食べたという記憶も無い。食べた記憶が無いのに、お腹が空いたという記憶も無い。食べた事を忘れたのか、それとも死なない程度の日数だったのか、いまだに分らないが結果として生きている。とにかく怖いという神経だけが働いていたのではないか。

そんな中で、あの低空する頭上のグラマン機が、飛んでいないことに気が付いた。上空の大型爆撃機も艦砲射撃も止む事はない。砲弾の炸裂音が遠い、至近弾が落ちない、ホツとする一方不気味でもある。振り返れば敵兵という事もありうる。怪訝な思いで私達は恐る恐る岩陰から出て見る。軍属のオジサンが丘の上に、そーと這って上がった。

頂上(着くや否や彼は私達に向かつて オーイ戦争が終わったゾー)と叫んだ。信じられない。本当にこの戦争が終わったの?その頃の私は、早く戦争が終わればいいとか、戦争に終わりがあると言うことさえ、考える力が無くなっていた。私たちも、丘の上に駆け上がった。すると四方人方からボロ切れの様な避難民が一点に向かってゾロゾロ歩いている。眼前の光景が理解できず暫く様子を窺っていた。夢のようだ。この戦争に終わりがあると。それでも私は日本が負けて終わったとは思っていないかった。日本は神の国「どれほどの窮地に追い込まれても神風が吹き、必ず日本が勝つ」と教え込まれていた。それにしても、これほどの人が生きていたなんて、何処に隠れていたのだろう。全く信じ難い事だった。後に沖縄のガマはこれ程の命を救ったのだと。しみじみ思った。

やがて、私達四人もボロ屑の一員となつて、みんなと同じ方向に向かつて歩いた。これまで物陰や暗がり求めて歩いた私達には、真夏の強烈な日差しを受け、ムキ出しの石灰岩、一木一草根こそぎ剥ぎ取られた岩肌は白く照り映え眼が眩む程だった。みんなの流れに沿って歩いた。その一点は近づいてみると、これまで見た事も無い真っ赤な肌と真っ黒な顔、特に真っ黒な顔の中の真っ白な歯と目玉は強烈な印象を受けた。初めて対面した米兵である。銃を担ぎズラリと並ぶ隊列の中に吸い込まれるように入って行った。その時流石に「あー日本は負けたのだ」と悟った。遠くではまだ砲弾の炸裂音が止まない。みんな広場に集められ、DDT」という白い粉、強烈な殺虫剤を頭から全身にたつぷり掛けられた。幾月も灼熱の太陽の下、汗を掻き垢だらけ、でも風呂に入らず、着替えもなく、ジメジメと蒸し暑い洞穴暮らし、蚤、シラミにたかられた難民の消毒である。更に何時間も歩かされた。砲弾の恐怖からは開放されたものの、どうなるのか分らないが、右も左も知らない他人とはいえ大勢いるので不安は無かった。

※ 奇跡的出会い

どれほど歩いたか分らないが、玉城村の百名まで来た時、宜野湾でお世話になっていた区長の許田さんが、難民の群衆の中に私を見つけ、飛び出してきて私を抱き上げ 無事だった?・みなさんは?・と矢継ぎ早に聞かれた。私は地獄で神様に救い上げられたような思いで、区長さんにしがみついたおかげで孤児収容所にも行かず、そのまま区長さんに引き取られた。

許田さんは文字どおり神様だった。毎日流れ込む難民の行列の中に知人と見るやすべての人を拾い上げ、一つ屋根のテント小屋に六十名以上の人を抱えて世話役となった。家族を失い一人きりの孤児となったにも関わらず、皆さんとても優しく、元気で学校にも通った。学校といっても丘の松の木に吊るしたベニヤ版を黒板にして、初めてA・B・Cを勉強した。みんなの親切に甘え、山の学校は結構楽しく、気が付いたら私は五年生だった。着たきり雀の私達は小川で服を洗い、草の上に干し、乾くまで水遊びに興じた。いつも枕にしていた救急袋の中に着替えが入っていると買った区長の奥さんが、着替えを勧めたので中身を見せた。あの「手榴弾」だ。驚いた区長さんがそのカバンをひたたくり駆け出していった。

当時は米軍のジープに子供が群がり、ギブミーキャンデーの頃だったが、私は子供心にも「こいつらのガムやキャンデーなど食べるものかー」と一人だけのささやかな抵抗を誓った。また。食料調達は米軍の援助物資の他に戦争で放置された近くの畠から大人達が芋やカボチャ、トーガンなど採って来るのだが、それは見た事もないほど大きな何十キロもある代物で私達は、お化け芋、お化けカボチャと呼んでいた。それがザラに採れた。お化け芋やカボチャは黒々と生茂った葉の下にあり、決して人骨があったという。まだ遠くでは砲弾の炸裂音が響く頃のこと、団体を組んで米兵の誘導で、その芋掘作業は行われた。

大人達が芋掘りに出払ったある日のこと、私は子守と留守を預かっていた。そこへ知人のおじさんが、慌しく飛び込んで来て、訳も言わず有無を言わず凄腕で私の手を掴むとグングン引きずって駆け出した。何がなんだか全く分からぬまま大きな道路に連れ出されたかと思う間もなく、いきなり私の身体は宙に舞い上がり、トラックの中に放り込まれた。そこで両手を広げて受け止めた人は、なんと父の妹「千代叔母」であった。

私は驚きと嬉しき、懐かしきや安堵感に一度に襲われ長い間、耐えていたものが堰を切って吹き出し、叔母の腕の中で只泣きじやくった。叔母は收容先の山原から、一かバチかの思いで南部に向かう米軍のトラックに当てもなく飛び乗ったとのこと。その頃はまだオフリミット地域がほとんどで、地域毎に区切られ、特に南部と北部の往来は不可能に近いほど困難を極めた。おじさんは南部の收容所に入つて来たトラックの車上に同郷の叔母の顔を見ただけで瞬時にその成すべき目的を察知して間髪を置かず行動してくれたのである。正に劇的な、奇跡ともいえるべき叔母との再会であった。父の妹(千代)は兄の医科大学(の進学)の為、自分自身の女学校進学を断念し、兄の学資の捻出に精を出したにも拘らず、愚痴ひとつ零さず兄をこの上なく敬愛し誇りに思っている。

そのまま、親戚の待つ山原の惣慶という所に連れて行かれた。中部以北の人達はほとんど、

山原に收容されていた。沢山の親戚に迎えられ抱きしめられた。その涙の再会の中で本当に驚いた。信じられない。あのアダン林で瀕死の重傷を負い、置き去りにした叔母(ツル)死んだと思ひ込んだあの嫁叔母がいた!・まさか生きていたなんて「あれ程の重傷で助かった?夢ではないか、本当だろうか、私は周囲の人たちの顔が全く目に入らないほど驚いた。しかし、ツル叔母は杖をつき、腰は曲り、頭は丸坊主で風呂敷を被って、まだ二十六歳という若さにもかかわらず、まるで九十歳、百歳のバアサンのように小さく萎びていた。私は子供心にも声も出さず、叔母の姿に涙をこらえる事が出来なかった。あの激しい砲撃の中を命がけで家

族の食料を一人で調達してくれた嫁叔母ツルは心根の美しい人である。

叔母の話によると、朦朧とする意識の中で気が付いたら米軍のトラックの中だった。子供達と共に拾われたらしいが、叔母はそれつきり幾日も意識を失い、次に気が付いた時は米軍の野戦病院のベッドの上だったという。杖を突いて歩ける様になり、米軍の野戦病院内で大勢の負傷者の中に息子と娘を捜し続けたが、遂に捜し出す事は出来なかったとのこと。

※ 終戦・叔父達の復員

漸く一部地域の開放に伴い、祖父父母の出身地である具志川に帰る事が出来た。更に幸いなことに、埼玉県所沢市の航空隊へ入隊していた叔父(父の末弟善治)と豪州からは母の弟功が、それぞれ復員した。戦没した家族みんなに二人の叔父は護られたのだと思っ

た。
戦後、私は、僅か八歳違いの叔父(善治)に育ててもらった。物の無い時代だったが、叔母たちの協力も得て心豊かに育ったと思っている。

次第にオフリミットも解け、兄と祖母の遺骨を収集する事は出来たが、他の遺骨は拾えず終いで、更にあれ程捜し続けた軍医の父と歩兵隊の叔父(義彦)も何処で戦死したのかさえ知る事も出来なかった。只、援護局から「昭和二十年六月十九日喜屋武方面にて戦死」と書かれた薄っぺらな紙切れ一枚が届いただけのみである。独立歩兵隊に入隊した父の弟もハガキによる「戦死公報」が届いただけだった。同居家族十名の中で奇跡的に無傷で生き残った私は、兄や祖父、家族の戦没に居合わせた私の役目として、あやふやな記憶を頼りに逆算して、戦没月日を決めた。父と兄は、互いにその戦没を知らずに逝ったのが、せめてもの救いであった。と私は今思う。

軍国主義の日本、天皇第一主義の日本、皇民化教育の中で当時の国民の大部分は、不満も怒りも個々の意見も胸中に抱えたまま本音を言葉に出来なかった。叫べなかった道理の通らぬ理不尽な抑圧の中の国民が、敗戦と共に一気に自由(の道)を突進した。今では国の非を見れば行政訴訟も個人の主張も出来る。当時の国民が国を相手に争うなど、考えた人がいたのだろうか。

この大戦で敗戦の道をとおり、日本はやつと目を覚ました。そして「二度と戦争をしない」と宣言し、経済復興と民主的な国づくり全力を挙げて平和で物質的に豊かになり、世界の経済大国の

仲間入りをした。軍国主義という過酷な社会背景は、敗戦で幕を降ろし、今、言論の自由を勝ち取り「もの言える」国民となった。

しかし、未だに世界のあちこちで、争いは続き、地球全体の平和というには、まだまだ程遠い。戦争の傷跡はなかなか癒えることなく、事件も絶えない。私同様家族の哀しみを持ち続けている人は五万といる。しかし先ずは、平和と云うべきであろう。

今日の日本人に許された「自由」というものの有り難さに日々浴するにつけ「よくぞ生かされた」という感慨を禁じ得ないのである。しかし、まだまだ危うい日本でもある。大事な家族を奪った戦争は憎い、平和な暮らしを壊した戦争は憎い、この怒りを何処（ぶちまけるといふのか。国か天皇か、はたまた戦犯として既に処刑された当時の権力者か！・・・）

誰もが願う「まことの平和」、私は思う。只単純に、爆音もない「自由にもが言える」この時代に父や兄、祖父母、叔父、幼い従弟妹たち、すべての戦没者に、生きてこの自由という「至宝の空気」を思い切り吸って欲しかった。過去の大きな不幸を思うに付けても、例え指導者が誤り、世の中がどの様な状況下に置かれても「命」の尊さ（の限らない畏敬の念を自身の内に決して見失うまいと思う）。

また、教育こそは「生あるものへの畏敬の念」という人間性の深い源流に発した、感性豊かで自由な精神を育て上げる事に、崇高で偉大な理念があると思う。その教育理念に徹することの重要性を、かつての為政者や教育者達が、より重く認識して居たならば！
∴、国民は国と国との争いに巻き込まれ、幾多の尊い命を失わずに済んだであろう。
終戦五十年を迎える今日、私達は改めて、この事をしっかり胸に刻み込み、我が沖繩こそは、去る大戦を教訓に、世界平和の発信地となるべきだと思う。それが、犠牲となつた多くの尊い命（の真の鎮魂に通ずる歴史の遠大な一筋の道であろうとしみじみ思うのである）。

了

平成七年 夏

玉城利枝子（旧姓 酒井）

あとがき

ものを書く。という心得も無いまま、拭い去る事の出来ない「あのおぞましき日々」二度とあつてはならない、あの強烈な恐怖の記憶が私に筆を走らせた。今でも、脳裏に鮮やかに残る瞬時、瞬時の出来事。幼なかつたせいも、状況は鮮やかだが日時や地名がよく分からない。いわゆる「千歳の記憶である」。

戦後生まれの従弟妹達に「あなた方には、この様な祖父母や叔父たち、従兄姉達がいた」事を伝えたかつた。あの時代に生まれ国と国との争いに巻き込まれてしまった。これが貴方達に逢うことも無く戦没した。身内の戦場の足跡だと知らせておきたかつた。

これはあくまでも私の家族の足跡であり、同じ南部の激戦の中でもそれぞれの立場で違う体験があつたと思う。国を守る、日本を守る軍人として。また軍属(防衛隊)として、中学3年生の学徒鉄血勤皇隊、女学生の女子挺身隊など、更に、民間の避難家族、引率教師と、父兄も含む一千七百名余を載せ、撃沈された。学童疎開船、対馬丸、激戦の中の悲惨さに比重の差違は無い。四ヶ月にも及ぶ激戦の地となつた沖繩。たつた一個の原爆で壊滅し、それぞれ十万余の命を失つた。広島・長崎も又しかり、否応無く巻き込まれた犠牲者達なのである。戦場とは人間の努力や頑張りが全く通用しない、問答無用の場であることを強く、認識して欲しい。自由であること、平和である事が「当たり前」と思つてはいけない。命の大切さを重く受け止め、その共感の輪を広げ、未来への伝達が薄れることなく続けられる事を願うばかりである。戦争が終われば敵をも許す。しかし「忘れてはいけない」生ある限り消えること無く、癒える事も無い。ひとつの「戦争被害家族の記録である」。

あれから十年(体験記を纏めてから)

しかし、戦争は始まつた。日本は仕掛け人「来国」に加担した。復興支援、人道支援、という美名の下に、危険極まりない戦地に、自衛隊は送られた。派遣隊員は、歯を食いしぼり、使命を果たします」と努力の笑顔でテレビカメラに向けた。家族は不安の涙で、夫を、父を、息子を見送つた。女子隊員まで送つた。「戦争放棄」を誓つた。その国民であることを誇りに思い、安堵したのは東の間の夢だつたのか。誓いを立て「憲法」に制定しても、井戸端会議と変わらぬ軽さで脆くも崩れ去ろうとする。

既に、国民被害は出た。外交官やカメラマンが犠牲になつた。このすぐちを、止める勇氣は日本にはないのか。イタリアもスペインも英断を下し、復興支援はするが、戦場からの勇氣ある撤退宣言をした。

破壊と殺戮の最たるもの、生きとし生けるもの全てを不幸にし、築き上げた文化遺産を破壊し、更に発展をも阻む。なんと愚かな所業を人間は繰り返してきたのだろう。島の緑もビルも、道路も美しく甦る。しかし、失われた「命」は戻らない。なんと言つても「命に代わる宝」はない。これから日本の若者はいかなる明日を迎えるのだろうか。日本の「憲法第九条」は護れるのか? :

若者よ! : 貴方たちで、護らなければならぬのです。自分自身のために! : :